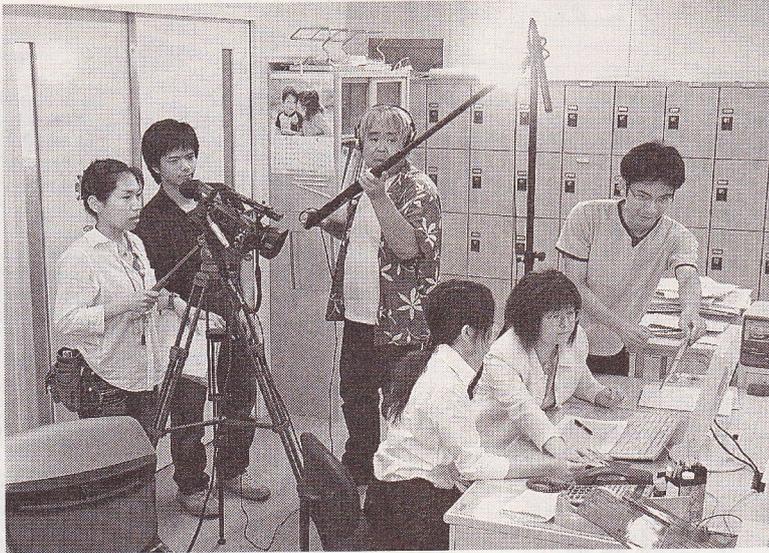


# ろう者と周囲 「協働」探る

職場で働く、耳が不自由な人にスポットを当てたドキュメンタリー映画が話題を呼んでいる。撮影したのは、名古屋在住でろう者の今村彩子監督(29)。周囲の理解が得られず、うつ病など

## 耳不自由な映画監督、企業を撮る

で離職するろう者は多い。映画では、現場の声や企業の先端的な取り組みなどを通して、ろう者と周囲の聴者が「協働」するためのヒントを与えており、企業からの購入依頼も舞い込んでいる。



## 相互理解にヒント

映画のタイトルは「サラリーマンライフ」。前半は、ろう者が働く職場の現状を紹介。実際に企業で働くろう者やその上司、同僚のインタビューやアンケートを通して、多くの職場でろう者とほかの社員のコミュニケーションが不足している状況を浮き彫りにする。後半は、社員向けの手話教室を開いたり、手話辞典を社員へ配布したり、ろう者と聴者が共に働く職場づくりに取り組む大手企業、一社の職場に密着。今村監督は「ろう者と聴者がどうしたら円滑にコミュニケーションがとれるかを考えるきっかけにしてほしい」と話す。昨年八月にDVDが完成。これまでに二百枚が売れた。企業の人事担

当者からの注文も多いという。今村監督自身、生まれつき耳が不自由だ。小学校は普通の学校に通い、いじめに遭い、不登校になった。聴者に合わせられないのは自分の努力不足。こうした考えがプレッシャーとなり、コミュニケーションを次第に避けるようになった時期もあったという。

ところが映画との出会いが転機となった。父が字幕付きで音がなくて、レンタルビデオ店で借りてきた「E.T.」や「ロッキー」などの洋画を見て映画に興味を持った。大学時代には映画制作

の勉強のためカリフォルニア州立大ノースリッジ校に一年留学。授業で一人ひとりに手話通訳がつくなど日本との環境の違いを感じた。こうした経験から、愛知県立豊橋聾(ろう)学校が舞台の作品や、大学に通うろう者に密着した作品など、ろう者にスポットを当てたドキュメンタリー映画を撮り続けてきた。

今回の作品では、企業が働くろう者の離職率の高さに着目。国は障害者雇用促進法で一定人数以上の障害者の雇用を義務づけているが、今村監督は「障害者の中でろう者の離職率が最も高い」と指摘する。障害が見た目

に分かりにくく、周囲の理解が得られにくいからだという。働くろう者の中には唇の動きで言葉を読み取る「読唇」でコミュニケーションをとる人も少なくない。しかし「コピー」と「コミ」、「一」と「七(しち)」など似た唇の動きの言葉が聞き分けられず、仕事上のミス

を犯すケースもある。「決してろう者の能力が低いわけではない。聴者とうる者の相互理解で乗り越えられる」。今村監督は、読唇で聞き分けにくい言葉は紙で書く、数字は指で示すなど、ちょっとした工夫でミスの大半は防げると訴えている。

「サラリーマンライフ」では実際に企業で働くろう者の姿を描く(今村彩子さん提供)